

まなび歴史通信

第39号
2006.6.1

大子町で「全国高等学校森林・林業教育研究協議会」を開催

来る八月九日から十日まで、「余暇活用センター やみぞ」で、第四十五回大会が開かれます。目的は「全国の森林・林業教育関連学科を設置する高等学校の教職員が集い、林業教育の当面する諸問題について研究協議及び情報交換を行う」ことです。全国で四十五校が加盟しており、参加予定者は約百名です。

昨年は、七月二十七・二十八日に愛媛県で行われました。

愛媛県は平成十七年四月より、森林環境税をとり生活環境の充実に充てています。林地視察で、林業家の岡さんは「林業と教育は似ている。十年後、二十年後を教えて育てる。今、ここで教えないといと、その子の将来はない。林業は毎年成長する。林業は奥が深い。駅伝競走と同じだ。」と話していました。

①専門委員会で、林業関係七十三校から演習林の利用の仕方など、アンケートをとり、森林・林業教育の将来へ、展望を与えていきたい。

②「生産流通科から森林科学科へ改編」 静岡県立天竜林業高校 「天竜林業高校のお兄さん、お姉さんが地球を守っている。」「森林の中で過ごすことは楽しいんだ。」「森林文化は大切な。」「森林インストラクター、森林セラピー、学びの森ユニバーサルデザイン化をめざす。」

③「森林環境系列への取り組み」新潟県立村上桜ヶ丘高校 森林と水をキーワードにヒトと森林のかかわり方について学習する。環境・森林・測量を担当している。生徒が自分の人生をどう生きるのか、そのためには教職員に何が出来るのか。

④「林業教育の将来像」愛媛県立上浮穴高校 林業後継者を育てる。それが、地域の活性化に結びつく。木

一ムステイや寮の整備、中学時代には表にたてなかつた生徒が生き生きとした姿で学んでいる。活躍の場を与えてやる。などの発表がありました。

平成十八年一月、茨城県の林業団体合同新年の集いで、次の決議文が読み上げられました。

茨城県の森林は戦後人工林として造成され、現在人工林の木材を利用する時代に入っています。森林は伐採→植栽→保育とサイクルが循環することにより、人々の生活を支えている。
①森林環境税の創設 ②岡山県の中国木材㈱が鹿島に進出するので、県産材の需要を拡大していく ③林業労働力担い手対策の推進 ④種苗生産者担い手対策の推進 ⑤県民参加の森林づくりや緑の募金活動を推進する

昨年の様子、県の決議文を紹介しました。

大会に向けての五月二十四日の役員会で、立正大学の福岡先生が「自然と人間のかかわりの中で林業を見定める。美しい森林をつくる、土地の生産性を引き出せる人を育てて欲しい。自然の再生を果敢に実践する行動的な人材の育成によって、国を変え、地方自治体を変え、林業者を変え、人間を変えていく林業教育が求められている。」と話していました。

現在、大子清流高校森林科学科は、高校再編できびしいのですが、生徒の希望する進学・就職への進路実現に努め、生徒の夢のもてる林業教育を進めていきたいと思います。(野内)

こんにゃくは最近ダイエット食品としてもてはやされてい る。確かに栄養価は殆ど無いに等しい。食品として刺身こんにゃくや糸こんになどに加工されたり、様々な食品の増量剤として利用される外、糊などにも使われている。

こんにゃくは六月、麦が伸び始める頃に球根を植える。一年で二、三倍に育ち三年繰り返すとかなり大きくなる。一年、二年ではまだ売り物にならない。一、二年生の玉は来年まで暖かい所で保管しておいた。農家ではいろいろの上に干棚が作られていて、そこに貯蔵しておく。だから寒い冬は、夜でもいろいろの火種を絶やさない様に、炭火に灰をかけて翌日まで暖氣が干棚に届く様にしている。

昔は各農家で荒粉に加工して売つたのだ。

秋になつて掘りあげると、集めて地中に浅い穴を掘り土をかけておく。こんにゃくは寒さに弱いのでこうしておかないと、腐つてしまうという事もあるが、この時期は稻刈りや麦蒔きなど目が回る程忙しい。だから秋の仕事が一応片づくまで貯蔵しておくのだ。初冬の晴天を選んでこんにゃく削ぎにかかる。

この日は隣近所の人たちも集まつて大勢でやる。ゆいといふ互いに助けあう方法で、手伝つて貰つたり手伝つたりする。

先ず埋めておいたこんにゃくを取り出し、大きな桶できれいに洗う。この仕事は前日にやる事もある。濡れていては仕事がやりにくいからだ。こんにゃく玉は中央にへこみがあり、ここから芽や根が出るので既に来年の芽が用意されている。この部分はきれいに取り去る必要があるので、竹で作ったへらで搔き取る。ぞくに「へそくじり」などと言つてゐる。

この玉をこんにゃくカンナで厚さ〇・五センチくらいに削ぐ。丸いせんべいの様な状態になる。これを長さ九〇センチくらいの串（こんやくしの）に一、二センチの間隔に挿す。この串を一〇本くらい並べて連に編む。

連に編むのは子供でも慣れると出来るので時々手伝う。でき

た連は干場を持つて行く。秋の取り入れが終わつた畑に干場の棚が作つてある。そこに掛けて乾燥させるのだが、一日や二日では乾かない。夕方になるとこの連を全部家の中に取り込まなければならぬ。よるの寒さで凍つてしまつては製品にならない。だからしばらくの間、毎日朝干場を持つて行き夕方取り込む。なにしろ何十連とか何百連という様な量だからたいたいへんだ。

最初の頃はまだ生だから、子供では一連だけ持つのがやつとである。乱暴に扱うと割れて落ちてしまう。毎日朝早く学校へ行く前に運び出し、夕方には運び込む。これは子供の仕事で手が冷たくなつてつらい仕事だつた。その頃は軍手などは使わず素手で仕事をしていたのだ。天候にもよるが一、三週間は続く。やがてすつかり乾くと、串からこんにゃくを抜き取る。乾くと串にがつちりとこびりついて、なかなか抜けない力のいる仕事だ。だからこれは大人がやる。縁側か台の上に腰掛け、地下足袋を履いた足で押さえて手で串を引っ張る。こんにゃくがぱりぱりとこわれて落ちる。

これが荒粉と言つてこの状態で^{かまき}入れて業者に売る事になる。仲買人が各農家を廻つて値段の交渉をする。買い集めた荒粉は、最後に工場で精粉にされる。この精粉から食べるこんにゃくを作る。

こんにゃくは売るまでに三年もかかる作物だが、この地方の一番の収入源だった。その年の値段によつて農家の一年の収入に影響するので、栽培には特に力を入れていた。（石井）



出征兵六十と蛇穴集落の楽隊

飯村 留道

上野宮の蛇穴の鈴木進さんから、「昔、蛇穴には楽隊がある。小学校の三年か四年生の頃だったので支那事変の頃かと思う。朝の三時か四時ごろ出征する人の家に行つて、大太鼓やラッパ等で、♪天に代わりて不義を討つ、忠勇無双のわが兵は（「日本陸軍」）とか♪勝つてくるぞと勇ましく誓つて国をでたからは手柄立てずに死なれよか（「露宮の歌」）を、ジャンガジャンガやりながら、蛇穴から村境の大金沢までやつて行つた。大金沢には朝の六時か七時頃着いて、ここで並んで万歳をやつて見送つて別れた。その時に使つた太鼓やラッパが、今も部落の蔵の中にある」との貴重な話を聞いた。

是非、その楽器を見たいと蛇穴の益子貞一さんに連絡したら、早速、集落の長老らが四人も立ち会つてくれて、蔵の鍵を開け一番奥に眠つていた木箱を取り出してくれた。楽隊を最後にやつたのが昭和二十四年の近津神社のご出社の時と云うから、六十年近くも蔵に眠つたままであった。墨で『楽器箱』と書かれた木箱を開けると、ふたには『明治三十八年七月拾八日購入、青年者一同』と、達筆な裏書きがあった。明治三十八年といつたら今から百年前の日露戦争の時である。

木箱の中には、大太鼓、小太鼓、トランペット、クラリネット、軍隊用ラッパ、緑青がふき出たシンバル等、時代を感じる代物ばかりで、特に大太鼓の鉄板の円筒の脇には、正面に交差した日章旗（日の丸）と旭日旗（軍艦旗）が鮮やかに描かれている。それに長さ二メートル半程の幟旗が一旒あつて、旗には『上野宮上組、青年音楽隊』と書かれてある。さらに、木箱の奥に小さい紙箱を見つける。紙箱には、半紙をこよりで綴じた和とじの『青年軍樂隊寄附帳、明治参拾七年十二月十三日発起

人』と、『青年音樂隊樂器修繕費積金簿、明治参拾八年旧四月十八日起上野宮上組音樂隊連中』と云う資料があつて、蛇穴集落の樂隊に関する貴重なる事實を知ることができた。

明治三十七年の日露戦争勃発の時に、国の為に戦場に赴く兵士を激励し壮行しようと、集落の有志が発起人となり寄付を募り樂器を購入して樂隊を結成したものと思う。また、『昭和拾九年度、樂器購入帳、蛇穴青年会』の書類もあることから、大東亜戦争末期の昭和十九年にも樂器を購入している。

さらにこれら書類の他に、『陸軍省陸軍恤兵部』から上野宮青年団宛の封書も何通かあつた。恤兵（じゅつべい）部とは、金品等を送つて戦地の兵士を慰問することを取扱う部署であることから、おそらくは陸軍恤兵部からの感謝状かと思う。これら古い書類や陸軍恤兵部からの封書を見るのは、立ち会つた集落の人らもこれが初めてだそうだ。

集落の人によると、「蛇穴の樂隊は有名で、青年団を中心にな小学生は笛を吹いた。樂隊は稻村集落にもあつた。赤い紙が来たんだぞ、そりや大変だと云つて、すぐ太鼓おん出して習つた（鈴木進さん）。新田の方まで迎えに行つてジャンガジャンガ（鈴木久治さん）。最後の頃は樂隊の見送りなどやつて青年団と一緒に大金沢までついて行つた（益子貞一さん）。送るのは普通は大金沢までで、小学生はみんな旗もつてエガイ騒ぎだつた（鈴木久治さん）。最後の頃は樂隊の見送りなどなく、浴衣の着物など着て目立たない格好し隠れるようにして行つた（鈴木久治さん）」と云う。

蛇穴で樂隊を結成した明治二十七・八年の日露戦争の時、黒沢村から従軍した兵士は六十一人である。このうちの何人かは蛇穴からも出たのだろう。この樂器類は、明治に生きた郷土の先輩たちが、大国ロシアとの戦いに赴く故郷の仲間のために、熱い思いを込めて購入した蛇穴集落の宝物である。

歌声ひびく明るい町を目指して（四）

—大子混声合唱団の足跡—

中心的行事、「秋の音楽祭」のことをもう少し述べよう。

合唱団発足十周年記念として行われたのが、第七回目の「秋の音楽祭」であった。東京オリンピックでの日本選手の活躍ぶりに日本中が沸き立つた直後の昭和三十九年（一九六四）十一月三日、午前十時半から午後三時にかけて大子小学校講堂で開かれていた。

国谷順一郎町長、小野瀬千代蔵教育長の来賓挨拶、石島康雄団長の主催者挨拶の後、第一部では合奏、合唱、独唱等十の演目が、また第二部でも合唱、独唱、ピアノ独奏等同じく十の演目が披露された。前回あるいは前々回のプログラムがないので比較することはできないが、出演者の顔ぶれをみると、町民の歌声サークル「うたごえこぶし」、大子営林署青婦部、大子町職青婦部、大子看護婦学院、大子電々コーラス、川俣雄司さんが主宰するユーカリ会児童合唱団、ユーカリ会の母親等々、出演者の幅が広がったようである。第七回プログラム寄せた挨拶文のなかで、石島さんは「町ぐるみの音楽祭」という表現を使っているが、回を重ねることにその形に少しずつ近づいていたようにも思われる。

しかし、それは事態の半面であつた。顔ぶれの点でもう一つ気がつくのは、肝心の大子混声合唱団が出演していないことである。日頃の練習の成果を発表する何よりの場である音楽祭に、しかも主催者である合唱団が登場していないことは何を意味するのだろうか。前述した出演者の広がりとは逆に、合唱団それ

自体が弱体化しつつあることの現れであつた。唯一合唱団の片鱗がみられるのは、メンバーである池田数和さんが第一部でバリトン独唱を、同じく片野克一さんが第二部でテノール独唱を披露したことくらいである。二人ともNHKののど自慢で合格したであろうことは想像に難くないが、本誌前号で紹介した第三回目に比べると、音楽祭における合唱団の存在感は俄然薄くなってしまった。

さて、大子町合併十周年記念協賛の形で開かれたのが第八回目の「秋の音楽祭」である。日時は昭和四十一年十一月三日の午前十時半から午後三時まで、会場は同じ大子小学校講堂である。この時も二部に分かれ、第一部は独奏、合奏、合唱、独唱等九演目、第二部は合奏、バンド演奏、合唱、独唱等十演目で構成された。出演者には、もちろん異同がみられるが、ハワイアンメロディを演奏した佐原青年バンドグループ、エレキギター演奏のザ・ワンドラーズ、炭鉱節、君が代行進曲、青い山脈等を演奏して音楽祭の最後を締めくくつた大子一高ブラスバンド部が新しい参加者であった。

だが、主催者の大子混声合唱団は、この八回目も出演していない。前回と同様、独唱で池田さんと片野さんが参加しただけであった。プログラムには、「うたいいましよう」「いっしょに」と呼びかける「団員募集」が掲げられたものの、団員は思うように集まらなかつた。同じ募集広告のなかには、「町民の皆さんにささえられて、私たち合唱団はともかくも十一年になりました。多勢の人といつしょに、これからもなかなかよく音楽活動をつづけていきたいと思います」と記されているが、活動の担い手であるメンバーぞれは一家の中心となり、合唱どころではなくなつていた。合唱団の終幕が近づきつつあつた。

（斎藤）

愛宕山の標石「義公日光廟遙拝之地」

愛宕山は、大子町愛宕町（大字大子谷津）に位置し、八溝山系の標高一八七メートルの山である。愛宕山の北側から西側は、谷間のような地形で湿地の多いとところであつたから、「谷津」と呼ばれていた。

この愛宕山の山頂に愛宕神社が鎮座しており、現在の愛宕町という町名は、この神社の名に由来している。昭和二年（一九二七）大郡線（同十二年水郡線と改称）が常陸大子駅まで開通すると谷津地内へ住宅街が広がってきたので、昭和三年十一月愛宕町と改名した。この愛宕神社の北寄りの杉林の中に、水戸藩第二代藩主徳川光圀公がこの地を訪れたとき、日光を遙拝した記念の標石「義公日光廟遙拝之地」がひっそりと立っている。徳川光圀公の旅行の範囲は、テレビドラマでは全国に及んでいるが、概ね水戸領内に留まり、なかでも町付（旧黒沢村）、鶯子（旧美和村）、潮来、馬頭等は、最も好んで滞遊したところである。



標石「義公日光廟遙拝之地」

宮があり、徳川御三家（紀伊、尾張、水戸）の領主が参拝することになつていた。もつとも遠くは熱海、鎌倉あたりまでである。鎌

編集人	斎藤 典生（茨城大学人文学部）
野内 正美（茨城県立大子清流高校）	
石井喜志夫（元 教員）	
小澤 圓彦（元 教員）	
鈴木 徹（大子町生涯学習課）	
遊史の会	
大子町立中央公民館歴史資料室気付	〒三一九一三五五一
久慈郡大子町池田二六六九番地	Tel 0295-1721-2627

倉は父頼房公の後見的な役割を果たした家康の側室英勝院が出家し、仏僧があつたからである。『水戸記年』によると、延宝二年（一六七四）四月公途ヲ発シ上総安房ヨリ鎌倉ニ至テ英勝夫人ノ仏祠ヲ拝セラル且名勝ノ地ヲ曆覧シ玉フ』とある。

光圀公は、藩主時代六回、西山に致仕（隠居）後五回、大子地方に計十回訪れ、多くの足跡を残している。愛宕山の標石「義公日光廟遙拝之地」もその一つである。

元禄年間（一六八八～一七〇三）に光圀公が大子地方を訪れたとき、愛宕山に登山をし、日光の東照宮に祀られている東照権現様に向かつて遙拝した。その記念に建立した標石である。遙拝の標石建立以後は寺社奉行が大子地方巡回の際には、愛宕山に登り、光の連山、南に月居山、男体山等が眺望でき、旧大子町の名勝旧蹟として知られていた。

（小澤）